シリーズ 探訪 わが町文化財 その125

明恵上人と神護寺

両親を失い、田殿の崎山良貞に引き取られた明恵上人は、9歳の時に母方の叔父にあたる上覚に付き従い神護寺（京都市）に入山します。神護寺が所在する京都高雄の地は、のちに明恵上人が高山寺を開いて活動拠点とした場所です。

神護寺は、空海とゆかりの深い名刹ですが、明恵上人が入山したころはひどく荒廃していました。その惨状を嘆き、その復興に命をかけたのが文覚でした。文覚は、三度の流罪にあった「荒聖人」とも呼ばれた真言宗の僧です。承安3年（1173年）、文覚は後白河法皇に対して神護寺復興のために荘園を寄進することを強訴し、御所に乱入して法皇の逆鱗に触れ、伊豆へ配流となります。伊豆で同じく配流の身となっていた源頼朝と親交を深め、平家追討を促した逸話は有名です。

その文覚に長年従い、右腕として神護寺の復興を助けた上覚は、明恵上人にとって身近にいる数少ない肉親であり上人の良き理解者でした。仁安3年（1168年）、文覚が高雄の地で修業を始めた当初から、上覚は文覚に従っています。明恵上人の祖父である湯浅宗重が実子を弟子にさせるほど、その関係は親密であり、湯浅一族が文覚の最も有力な支援者であったことが分かります。明恵上人が神護寺に入山したことも、湯浅宗重と文覚の深い関係によるものでしょう。

源平合戦の真っただ中の寿永元年（1182年）、文覚の宿願は後白河法皇に聞き届けられます。最初に寄進されたのは、桙田荘（現在のかつらぎ町笠田地域周辺）でした。明恵上人が神護寺に入山したのは、養和元年（1181年）のことなので、その直後から神護寺の復興が本格化したことになります。

明恵上人は、23歳の秋に紀州に戻るまでの約14年間、この地で真言密教を学ぶとともに、仁和寺や東大寺などにも通って華厳宗を兼修しました。

源頼朝没後、後鳥羽上皇に疎まれた文覚は、佐渡・対馬に配流となって亡くなりますが、上覚がその後継者となって神護寺の復興を成し遂げました。

神護寺金堂

●〒643-0021 和歌山県有田郡有田川町下津野2018-4
●有田川町役場企画調整課 TEL 0737 - 52 - 2111（代）
●E-mail b.kikakuzaisei@town.aridagawa.lg.jp
●ホームページURL https://www.town.aridagawa.lg.jp